

東北学院大学金子研究室川内村プロジェクト報告書

文責：伊豆原 滉一郎・小野寺 詩乃
・小賀坂 彩恵・新里 明日香

1. 活動の主旨

本報告書では、つぎの3点について整理してゆく。第1に本プロジェクトの主旨、第2に2022（令和4）年度の活動内容、そして第3に次年度に向けての展望である。以下、これらについて順を追って記述する。

本プロジェクトは、双葉郡川内村第7行政区での集落復興活動を行なう。私たちの活動は、「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の枠組みでは、2年目に位置づけられ、今年度は実証活動にあたっている。ただ、つぎの2つの理由から、実質的にほぼ1年目の活動であった。第1に本プロジェクトの先行する活動（1年目の実態調査）は、他大学（跡見学園女子大学地域文化研究会）での取り組みであったこと。第2に、地域文化研究会の活動は2019（令和1）年度に実施され、その後コロナ禍となり、継続した実施が困難であったことである。

そのような事情があったものの、先行する活動で見出された課題を引き受けながら、参加メンバーは今年度初めて川内村で活動を行なった。ここでいう明らかになった課題とは、つぎのようなものである。川内村は原発事故により避難を余儀なくされた。その後いち早く帰村を選択したため、帰村率は高い水準にある。だが、震災後、過疎・高齢化が急激に進行している事実が明らかになった。とりわけ、これまで継承されてきた地域文化が衰退しつつあるという現状を把握することができた。寺社仏閣、堂宇・小祠といった、これまで集落単位で維持してきた地域文化が、維持し難くなっている現状を見聞きした。

私たちは、民俗学を専門としており、この領域では現地に出向き、緻密な聞き取り調査を行なう、フィールドワークを重要な研究手法としてきた。この方法を学んでいる私たちは、たんに地域の人びとと交流するだけでなく、民俗学の方法論にもとづいたフィールドワークを実施する計画である。すなわち、私たちの活動の目的は、民俗学の手法によるフィールドワークを通じて、集落の人びとが抱えている課題を把握し、また、その集落が持ち伝えてきた文化的資源を掘り起こすことで、少しでも地域の復興や集落維持のサポートを推進してゆくことにある。

地域課題と私たちの強みとを総合し、今年度の調査では、地域で大切に守られてきたが、担い手不足が深刻化しつつある地域寺社の調査に取り組みたいと考えている。とりわけ寺社の歴史的な分析を行なうことにより、この地域において当該寺社がいかなる由来・由緒や来歴をもつものであるのかを明確化していきたい。このような調査・研究を進展させることで、地域内で寺社を維持するモチベーションを高めていただくことや、外部からの支援の可

能性がひろがるものと期待している。

つまり、私どもの狙いは、地域の文化的資源を活かした復興である。このような取り組みは、インフラの復興とは異なり華々しさはないが、地域に住む人びとにとって重要なものであると確信している。これが私たちの活動理由であり、民俗学の視点を活かして、現状のままでは失われてしまう可能性のある地域資源を掘り起こしながら、地域の復興・持続へとつなげることを目指している。

2. 今年度の活動内容

ではつぎに、本年度どのような活動を行ってきたのか、3つの項目にわけて記述する。それはすなわち、歴史資料調査、石塔調査、聞き取り調査である。なお、コロナ禍での活動となることから、地域の方々との接触が比較的少ない、前2者に力点を置きながら活動を実施した。

2. 1. 歴史資料調査

私たちは今年度から本格的に、川内村に関する古文書の調査を実施した。この調査では、前述したように、川内村において、その寺社がどのような来歴をもつものなのかを把握することを目的としている。現在私たちが調査を行っているのは川内村第7行政区の横田家文書である。今回私たちは、所有者から古文書を借り受け、調査を実施した。

本調査は、保護→冷凍殺虫処理→クリーニング作業→資料カード作成→資料目録作成→撮影の順に進めた。この一連の作業で古文書をより良い状態で保管するとともに、これらの古文書がこういった性質のものであるのかの把握に努めた。結果としてこれらの古文書は17世紀から18世紀にかけての地蔵院関連文書であり、歴代法印の名前が確認されたことから儀礼文書でもあると判明した。

上記の調査を行ったうえで、全古文書の写真を撮影してデータ化する作業を行った。この作業によって貴重な資料が後世まで残り、私たちを含め後の研究に活かせるようにとの思いで実施した。以下は、一連の調査の様子とデータ化した古文書の例である。

今後は、これらの古文書の詳しい内容を調査するとともにより細かい分類を行うことで更なる内容理解を進め、今後、資料集の作成を目指している。



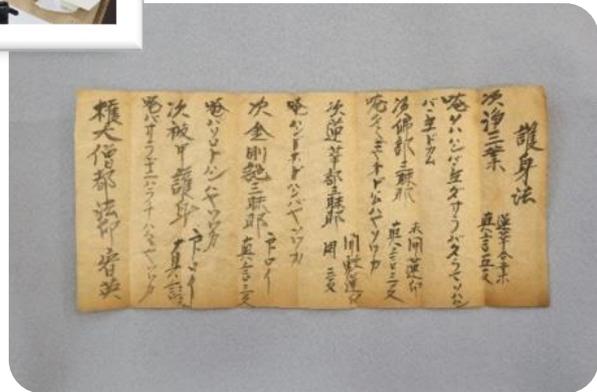
←冷凍殺虫処理した
資料の整理・分類

お札の一例→





←クリーニング作業・資料のカード作成



データ化した古文書の一例→



←資料の写真撮影・データ化

2. 2. 石塔調査

つづいて石塔調査では、7区内の石塔を調査した。主要なものを示すとつぎの通りである。

原地区の地蔵院多宝寺には、念仏供養塔、二十三夜需供養塔、馬頭尊（馬頭観音）、三界万霊塔などが建立されていた。念仏供養塔は諸尊通字、大日如来、宝幢如来を表す梵字が刻まれた供養塔である。二十三夜需供養塔は、「月待」という決まった夜に月を拝む行事で建

てられる「月待塔」の一種だ。二十三夜需供養塔から、川内村では二十三夜に月待を行っていたことがわかる。馬頭尊及び馬頭観音は、馬が死んだ際に立てられたといわれる。三界万霊塔は「大正八年六月吉日」に建てられていた。



東山地区にある姥神神社には、祠・山神尊、馬頭尊、二十三夜塔が建立されていた。山神尊には「天保十四年十月吉日」「東山女講中」と刻まれていた。この「東山女講中」とあることから、東山地区において、山神を祀る女講中が建てたものである。馬頭尊は複数あるが、判読できた文字を示すとつぎの通りである。「明治



四十四年／九月二十三日」「久保田正喜」(写真左)、もう片方は「昭和二十六年七月二十七日」「久保田安兵衛」(写真右)といった建立日と建立者名が彫られていた。「二十三夜塔」と彫られた石塔は、地藏院の二十三夜需供養塔と同じ月待塔である。

同じく東山地区の八雲神社では、庚申塔と文字塔があった。庚申塔は明治39年の物である。庚申塔また庚申供養塔は、庚申の日には人々が夜通し集まって会合する「庚申待」という行事で建てられた石塔だ。月待行事の他に川内村では庚申待も行なわれていた事がわかる。文字塔は、延享四（1747）年の銘があり、金剛界五仏を表す5つの梵字が彫られていた。

以上の他にも、第7行政区内の神社や道端に数多くの祠・石塔があることが確認できた。



夏季休業中に行なった合宿では、その一部を記録したに過ぎない。全ての石塔が、その場所に昔からあったわけではなく、生活の変化の中で移動を強いられ、さらには震災後に撤去されたものがあるなど、ずっとその場所にあるように感じられる石塔であっても、じつは大きな変化がみられることも確認できた。

現在に残された石塔を調査する事は、川内村の人々がどのような信仰を持って生活してきたのか探る重要な手がかりの1つである。今回の石塔調査では川内村で行なわれていた月待や庚申待などを知ることができた。次回の調査で他にも残されている石塔を調査し、さらに川内村の信仰を探っていききたい。



←石塔調査の様子

2. 3. 聞き取り調査

コロナ禍での活動となったため、当初より積極的に聞き取り調査を行なう計画はなかった。そのため、今年度の調査は、資料調査や石塔調査を中心に行ったが、幸いなことに、久保田行政区長のほか、数人の方に聞き取りを行うことができた。この聞き取りでは、震災以前からの祭祀や震災前後の集落の変化についてお聞きした。

石塔の調査中に声をかけていただいた菅波さんからは、祖母から聞いた話、自身が当時の集落でどのような祭祀や行事を行っていたのか、震災後の村や集落が抱える課題などを聞くことができた。そのお話の中で、川内村は震災後に集落が過疎高齢化にあえいでいる状況を聞き、集落単位で行っていた祭祀を行うことが出来なくなってしまった現状を知ること

ができた。こうした現状は、家の祭祀でも見ることができ、神棚が返却される場面にも出くわした。

じつは集落が管理してきた寺社仏閣には、損傷しているものも少なくないことが確認できた。それらの修繕が課題となっていることは、多くの住民が理解しているが、次世代の帰村がなかなか見通せない中で合意形成を図ることが難しいと実感させられた。



←聞き取り調査の様子

4. 次年度へ向けて

次年度の目標は大きく分けて2つある。1つ目は、今回行った「歴史資料調査」「石塔調査」「聞き取り調査」をさらに進めることだ。それぞれの項目に関して、今後取り組みたい内容は以下の通りである。

「歴史資料調査」では、横田家文書の仮目録を作成する段階まで完了した。今後はその内容をもとに資料集を作成してゆきたい。石塔調査では、悉皆調査を行なったはずの『川内村史』に記載が無い石塔も確認できた。この成果は、川内村の信仰・生活を記録し、伝えていくうえで重要だと考える。聞き取り調査では、今回は基本的に行わない形を想定していたが、ご厚意によって、ヒアリングを実施することができた。調査が実現したのは、川内村の方々との間に信頼関係があったからだと考える。今後も調査地の方々とのコミュニケーションをとる機会を設けることで交流を継続していきたい。

2つ目は、展示の実施と研究報告書の作成である。川内村の寺社に関する調査研究を集落維持に役立てるためには、成果を広く周知することが不可欠だ。そのために、大学や川内村のスペースを活用し、一般の方々に向けて調査結果を分かりやすく伝えたいと考えている。また、研究報告書を作成し、研究者に向けた成果報告を行っていく予定である。報告会は川内村でも実施し、活動の成果と意義を住民の方々に広めることを目指したい。